

山村若隼紀／咲くやこの花インタビューvol.30

山村若隼紀(やまむら・わかやはやき)【平成19年度 演劇・舞踊部門 [舞踊]】



取材場所に現れた瞬間、ふわりと空気が華やぐ。和やかなオーラに自然と笑顔で近寄りたくなる。ほっこりとした語り口に、はんなりとした佇まい。さりげなく艶やかに和装を着こなすその人の名は、山村若隼紀さん。谷崎潤一郎の小説「細雪」で主人公妙子が踊る地唄「雪」のように、当時の流行歌である地唄に振りをつけてお座敷などで舞われて来た上方舞。その伝統芸能を今に伝える舞踊家のひとりです。師匠は文化庁芸術祭賞を3年連続で受賞し、紫綬褒章、旭日小綬章を受けるなど、80年近く芸道を邁進する上方舞・山村流の代表的な舞踊家、山村若佐紀さん。「指導法、舞への情熱すべてが魅力的」と仰ぐ師匠との出会いから芸にのめり込んできた数十年の歳月、そしてこれからについて。上方舞の魅力と共に舞踊家としての思いを伺いました。

◎取材・文・撮影：石橋法子

美大生の頃、作品を深めるために日本舞踊と出会いました。

「咲くやこの花賞」を受賞された当時のお気持ちから、お話を伺えますか。

「咲くやこの花賞」頂いたことをきっかけに、ぱあーっと世界が広がりました。それまでは先生のお家に通ってお稽古をして、年に数回先生が主催する会に出演させて頂く。本当に一弟子のひとりとしてやってたんですけど。「咲くやこの花賞」を頂いてからは、いろんな劇場でいろんな人に舞を見ていただく機会が増えて。また、こちらの賞は同時に色々なジャンルの方が受賞されますよね。僕も頻繁に意見交換会などの席にも呼んで頂き、美術家や音楽家など、普段接する機会のないアーティストの方々とお話しさせて頂く機会があったり。すごく刺激的な毎日が始まった、そんな受賞でした。



当時ご自身の中でも、賞を意識するような時期だったのでしょうか。

「第40回なにわ芸術祭 新進舞踊家競演会」新人賞を頂いてから5年ぐらいは、何もなかったんです。ただ、30歳を目前の頃から若佐紀先生が「30代になったら今度は『咲くやこの花賞』を貰えるぐらい立派な舞踊家になって欲しいな、大阪で一番良い賞やから」という話をして下さっていて。僕もそんな賞があるんだなと、賞とかあまり分からないでやっていたけど「いつか僕も」と思うようになりました。実際に頂けたことは凄い転機になりましたね。もう(人生の)ピークです(笑)。

若佐紀先生もさぞお喜びに？

先生も非常に喜んで下さいました。「今まで頑張ってきて良かったね」と。大阪市の方から受賞のお知らせを頂いたときは、本当に僕何も分からなかったので「一度先生に相談して、それからご連絡させて頂きます」と言って、先生に「頂いてよろしいのでしょうか？」と訪ねたという思い出があります(笑)。

そもそも上方舞とは、どのようにして出会われたのでしょうか。

昔から絵を描いたりするのが好きで将来はデザイナーさんになりたくて、美術系の大学に通っていました。机やキャンバスに向かってデザインや絵を描いていたんですが、出来上がってもキャンバスの中だけの表現なので、自分のなかで「難しいな」という思いがあったんですよ。

なにか満たされない感覚があったと。

もっと色々な勉強をすれば、作品に奥行きが出るのかなと思って。日本の文化を知りたいとバレエをやっていた知り合いの方に話をしたら、「役所に行けばいいんじゃないか」と教えてくれて。その方は奈良の方で、奈良だと舞楽とか昔の古い芸能を紹介してくれるらしく、大阪市ゆとりとみどり振興局 文化振興課(現「経済戦略局 文化課」)に出向きました。そこで話をして「日本舞踊の山村若佐紀先生という方がいらっしゃる」とご連絡先を頂いて、その後入門することになりました。

大学生の頃にデザインの表現を深めるために、伝統芸能と出会われたんですね。

若い頃は海外の文化に興味向きがちですが、僕は日本舞踊だったら日本の昔の言葉や音楽、それから着物に触れ合う機会もできますから、着物の歴史、図案の歴史などもいっぺんに全部学べるんじゃないかなと思って、すごく良いなと思ったんです。それでやってみたら、絵を描くよりもずっと楽しくて、のめり込んで行きました。

当時はどういう部分に楽しみを？

やっぱり画面に向かって描くよりも、ダイレクトに身体でパッと表現できるのが僕の性格に合っていた。身体で立体的に表現できるのがすごく楽しかったです。



それまでの不完全な感覚も解消されて。

その感覚はありましたね。若佐紀先生がそのように導いて下さったと思うんですけど。僕はものすごく先生の指導法、舞に対する情熱なんかも含めて魅力的に感じました。

印象に残っているエピソードはありますか。

本当に着物の着方すら分からなかったので、そんな僕でもお稽古つけて頂けるんですか、とお話したら、若い方がこういう大阪の文化に興味持ってくれること自体が嬉しいから、特別な準備もなく「いらしてください」と。

若い男性というのも珍しかったのでしょうか。

もちろん女性ばかりですし、皆さん綺麗に着物を着こなしている方ばかりだったので、はじめはちょっと後ずさりするような気持もありましたけど。同世代の方も皆さんキチンとされてる方ばかりで、僕みたいなんが「大丈夫かな」と(笑)。でも若佐紀先生が優しく教えて下さったおかげで、あっという間に上方舞が好きになりました。本当に夢中でしたね。

舞は人生勉強であり、人間を勉強するものだと言われました。

大学卒業は迷わず芸事の道へ。

周りは就職活動を始めの中で、僕は就職するという考えがもう無くなっていて。アルバイトしながらお稽古できたらいいなと。両親からも「就職活動しなくていいの？」と一言もいわれなかったので、とくに迷うことなくお稽古を続けました。もともと美術の方向に行かせてあげようという感じの両親なので。僕がしたいこと

は反対せずに何でもさしてくれたのかなと思います。大学も最初の1、2年は頑張ってたんでわりと成績も良かったんですけど3、4年になってくると上方舞ばかり。何かに探究するのは昔から好きでしたね。

若佐紀先生からは舞のみならず、多くの事を学ばれたそうですね。

もちろん舞台に上がる前には厳しく教えて下さいます。でも基本的に舞の出来不出来に関してはそのひとの持ったものがありますので、厳しく…というよりは各々のペースに沿っての指導というか。それ以上に礼儀作法だったり、心の持ち方についてはものすごく厳しくご教授頂いたと思いますね。

その心の持ち方とは、踊に対しての？

何事に関しても感謝の気持ちを忘れてはならないと先生はいつも仰られます。些細なことでも相手のことを思って日頃から優しい気持ちでないと、やっぱり唄の中に出てくる人物の心も分からないし、表現もできないと思うと。



芸の奥深さに通じるお話ですね。学ぶべきは振付ではなく、舞を舞う人の在りようの方なのかもしれません。

本当にそうですね。表面的なものじゃなくて、先生は舞は人生勉強であり、人間を勉強するものだと仰られます。

裏を返せば、上方舞は多様な人間の人生を舞う芸能だとも言えそうです。

上方舞に出てくること女性に関して言うと、会えなくなった恋人を1、2年とかではなくて、もうずっと髪が白くなっても若い頃の恋を忘れないで待ち続ける女性の忍耐強さとか、なかなか会いに来てくれないけど、会いに来てくれたときには優しく迎え入れる心とかが表現されています。そういう忍耐強さや優しさを常日頃から意識していないと、舞台上のその場限りの表現では、きっと観て下さるお客様の心の中には入っていけないよと。そういうお話を先生から聞いた事があります。

同じ伝統芸能でも例えば、歌舞伎舞踊とは印象が異なります。上方舞の特徴や魅力とは。

歌舞伎の場合は、大きな舞台でたくさんのお客様に観て頂く商業演劇としての一面もありますので、やはり衣裳もお化粧も大胆な発想で考え抜かれています。山村流の舞の場合はもともと歌舞伎の役者さんが始めたお流儀ではあるんですけども、発展の過程で大阪の船場の御座敷であったり、芸妓さん、舞妓さんが御座敷で披露するための芸能として発展してきた面がありますので、そこまで派手さは求めない。素踊り、(特別な衣裳や化粧もなく)このままの姿で表現するというのが上方舞、京舞、含めましての特徴かなと思っています。

演目の違いや特徴は？

上方舞は地唄に乗せて舞を舞うのが一番の特徴だと思います。京阪神に伝統的に伝わっている「地唄」という音楽があるんですけど、地酒とかと同じように大阪、京都、神戸の土地で生まれた音楽の種類のことです。なかなか歌舞伎では地唄を使うことはあっても舞踊作品に使われることは多くないと思います。例えばBGMで使うことはありますが。

「地唄」そのものに傾向はあるのでしょうか。

おとなしいと言ったらいいんでしょうか、静かな音楽ですね。もともと目の見えない検校さんがされていた音楽なので、歌舞伎の長唄だったり常磐津みたいに、鼓とか太鼓が入るわけでもなく、本当に三味線一本で演奏者の方が歌も歌ってと、弾き歌いされるのが特徴じゃないかなと思います。基本的には、三味線、箏、胡弓の三つがセットになっています。

そういう静かな男女の心の動きなどをお座敷という場で舞で表現する。とても親密なムードを持った芸能にも感じます。

そうですね、歌舞伎と違って間近で観て頂くことになりますので。表現が何ていうのか、大きくもなく。もうわずかな顔の傾き方、目の動きはお客様にきつと見えていると思いますので。それこそ技術じゃない、その人のそのものを見せる、見えてくる。本当に雰囲気があるものだと思います。

歌舞伎などの衣裳やメイクは、大きい会場でも広くお客様に届ける配慮もあるのかもしれません。

御座敷の場合はお酒を飲まれたりお食事をされたりしながらご覧になることもあったそうなので、実際に京都では今でもそうでしょうけど。足元の所作もごくごくおとなしく、優しく動かさないといけないよと言われる。

見た目の静けさに反して、見た後は熱いものが残ると思います。

聞くほどに日本舞踊を体得すると、人としても細やかな配慮のできる素敵な人間になれそうです。芸事の一方で、そういう自分自身を磨く楽しみもあったりするのでしょうか。



楽しみというか、修業ですけど(笑)。でもやっぱり舞をお稽古するのは唄の中の人物の心を考えてみたり、その時代のひとの生活なんかを感じてみたり。後は演奏家の先生が唄う調子なんかにもやっぱり、僕はこう思っているけど、演奏家の先生はどう感じて演奏されているのかなと声の調子だったり、三味線の音、間などで思いを感じながら舞うのが楽しいです。

演奏家の方とは、事前にすり合わせなどはされないのですか。

ゆっくり弾いて頂けますか、テンポよくお願いしますとか多少はありますが、表現に関して演奏家の先生がどう思っているのかということはあまり聞かずに、感じ取るような気持で舞わせて頂いています。

伴奏というより、一緒にという感覚でしょうか。

何となく僕は演奏家の先生の音楽の中に引き込まれて、その中で舞わせて頂いてる感じ。こっちの思いをぶつけるというのは、僕の性格的にはあまりないですね。

ジャズのセッションのような趣も感じますが、その中でやはり型のようなものもあって。

型はありますね。若佐紀先生にも直して頂きます。先生は「あと何ミリ指先を上げて」とかミリ単位で調整されます。

デザインを学ばれた若隼紀さんからして、“正解の型”というのはやはり美しい？

型の美しさというのは感じます。自分でおさらいをしますけど、若佐紀先生に直して頂くと型自体に艶みたいなものが出たり、それこそキツさがなくなる。形が優しくなるとか、そういうことを感じますね。

冒頭にも「優しい気持ちで」とのお話がありましたが、それは若佐紀先生の持論、あるいは上方舞に共通する要素でしょうか。

上方舞自体にある要素だと思います。「もっちゃりしなさい」「はんなりしなさい」という言葉も時々聞きます。後はお客様を思っただけの優しさ。時間を割いて観に来てくださる方に喜んでいただく、感動していただくにはどうすればいいのか、そのことを若佐紀先生は常々仰っています。

芝居とは違う舞の見方、楽しみ方があれば教えてください。

上方舞は見た目の情報量が凄く少ない芸能だと思うんですけど、だからこそ観て頂く方が自由に思ったまま、感じたままに、楽しんで頂けたらいいなと思っています。

言葉で明示されないことで、何気ない仕草や表情に知っている感情を呼び起こされたり、似た人の顔や情景を思い出したり、各々が共鳴する余地があるのが醍醐味だと。

舞っている方がその曲をどう思って舞っているのか。戸を叩く仕草だったり、足を一步踏み出す間とか動きの中に、僕はそういう思いみたいなものを感じ取れたときすごく観ていて嬉しくなるというか、そういうのがありますね。本当に見た目の静けさに反して、やはり観た後は心の中には熱いものが残ります。

日本舞踊をお稽古されている方の話で、例えばその日気分が沈むようなことがあっても、お稽古から変える頃には気分が晴れていると。若隼紀さんご自身も、そういう経験や実感はお持ちですか？



仰るように、お稽古って振りを教えるだけの場じゃないと思うんですよね。やっぱり日常生活の中で感じるストレスとか、問題は皆さんあると思うんですけど。それをそのとき一瞬でも忘れられるような時間づくりができればいいなと、いつも生徒さんと向かい合いながらお稽古しますね。だからお稽古の前の時間と後の時間はなごやかに楽しく、その方の日常のお話を聞いたり、僕も生徒さんにお話を聞いて貰ったり。お互いに楽しい時間を送って、それもすごく大事なのかなと思っています。

気持ちを共有して人間として寄り添い、育てていかれているという感じが伝わります。そういった心の交流がひいては芸事の上達にも繋がります。

若佐紀先生のお稽古場に伺ったときもそうですね、舞を舞う時間と同じかそれ以上にコミュニケーションの時間をやはり先生も大事にされていて。前後に待っている人がいないときは、ゆっくりお話しされます。家族の方はお元気ですかなど、本当に些細な日常生活の話を気に留めて聞いて下さる。若佐紀先生もご自分の経験をその場で思い出しながらお話くださるので。昔の御家元先生はこんなことを教えてくれた、だから今の御家元先生にはその時に嬉しかったこと、ありがたかったことをもっと大きくして恩返ししたいとか。そういうやり取りの時間をすごく大切にしてくれるので楽しいですね。

上方舞を観るだけでなく、表現することの喜びも感じて貰えたら。

少し大きな質問ですが、若佐紀さんにとっての舞とはどういう存在ですか。

何だろう分からないですね。僕あんまりそういう風に思わないようにしているというか。ある程度距離を置いてないと、それこそ本当に「観て欲しい」という一方的な表現になりそうで。僕の場合はしたくない。舞を自分のもののようにしては考えてないんです。やっぱりご宗家から教えて頂くこと、若佐紀先生から教えて頂くことを学び続ける。そういうものだと思います。

お話を聞いていて、到底自分ひとりの表現では叶わないというスケールの大きさを感じました。スターの舞ではなく、舞こそスターだというような。

本当にそうだと思います。教えて頂いたことを自分の身体を通して見せてはいますが、みんなで共有するからこそ、表現できるものだったりするのではないかと思います。御家元先生、若佐紀先生、先輩方から日々教えて頂いていることを出来るだけこぼさないで、自分の中に溜めていって、それをまだ上方舞を知らない、あるいは知りたいなと思っている方に少しずつでも共有していけたら一番いいのかなと思います。



芸を伝えるという意味では、教室の生徒さんにはどのように向き合われていますか。

200年以上前から大阪をはじめ、京阪神で大切に育まれてきたこの上方舞という文化をひとりでも多くの方に感動的で楽しいものとして、観るだけじゃなくて、自分もやってみることで表現する喜びを感じて貰えたら。微力ではありますが僕なりの貢献ができるように、一人でも多くの方に上方舞の魅力を知って頂けたらと思っています。

これから、についてはいかがですか。

第一にやっぱり舞を続けることが一番大事かなと。だんだんこういう世の中なので、お稽古する人も減っていますし。続けることはたやすいことではないのかな、というのはここ10年ぐらいは特に感じます。

その上で、若隼紀さんを舞へ向かわせる一番の原動力は？

舞が好きだということはもちろん、周りの皆さんが支えてくれているということですかね。若佐紀先生であったり、ご宗家の御家元先生であったり、家族だったり。イベントを企画して呼んで下さる方も含めたすべてが僕の原動力です。

その思いの裏には、時としてくじけそうになったこともあったと。

やっぱり年齢を重ねてくると、身体が変わって来るのを感じます。あとどれぐらい舞が出来るのかなと思った時期もやっぱりあって。舞の家に生まれているわけではないので、踊れなくなったら、続けることはできないよなとか。でもそういう時も辞めてしまうのは簡単だけど続けて来たもんを大切にしないといけないとか、励まして下さる方々がいたから持ちこたえられたことが凄くあったので。先生やお弟子さん、周りの皆さんのおかげで続けられているんだなという思いがあります。



改めて、上方舞と出合われて良かったですか。

そうですね。今でも人前に出るのはあまり得意ではないですし、舞とはこんなに苦しいものかと思ったこともありますけど。でも舞と出合ったお陰で普段の生活ではお目にかかれなような方たちとお目にかかれたり、思ってもみないような出来事にも遭遇するので。すごく変わったと思います、生き方が。

ちなみにご両親から見ても性格は変わったと？

両親は商売をしていますんで、小さいころは親に構ってもらえる時間が少なかった。両親は自分たちが教えられなかったことを全部若佐紀先生が教えてくれたと、「私たちの代わりに息子を育ててくださったことは本当にありがたい」と話しているのは、聞いたことがありますね。若佐紀先生、御家元先生にはすごく感謝しています。

最後に恒例の質問です。若隼紀さんが名物として「咲くやこの花賞」を贈呈したくなる、大阪の好きなところを教えてください。

僕が思う大阪名物は阪堺電車です。僕の実家の前が阪堺電車の線路なんです。恵美須町から浜寺公園までの線路が生まれたときからあって、“チンチン電車”のガラガラという音を聴きながら遊んでいました。いまも文楽劇場だったりお稽古から帰る時もある恵美須町で降りて阪堺電車ですごくゆっくりコロコロと運んでくれる。目線も高くもなく低くもなく、いつも見ている景色と同じ景色で進んでいくのが、何となく優しいというか好きですね。天下茶屋のあたりとか線路のギリギリに家が建ってたりするんですよね。洗濯物がわーと干されてるのを「飛んで行けへんのかな」と思ったりしながら見てるのも楽しいですね。



【略歴】山村若隼紀(やまむら・わかはやき)

大阪市出身。平成7年3月に山村若佐紀門下 入門。平成11年に京都精華大学・美術学部デザイン学科卒業。平成13年4月に名取・師範免状 取得。現在、大阪、難波、京都で個人・グループ教室を開催。主に国立文楽劇場や大阪倶楽部を拠点にさまざまな会に出演中。



【受賞歴・受賞候補】

平成 15 年「第 40 回なにわ芸術祭 新進舞踊家競演会」新人賞、大阪府知事賞受賞。平成 20 年「平成 19 年度咲くやこの花賞(演劇・舞踊部門)」受賞。令和 03 年「東大阪市文化表彰」。

【公式 HP】 <https://wakahayaki.com/>